私の家族を支えた税金

千歳市立富丘中学校３年　　板坂　優衣

あなたは、「幸せ」と聞くと、一体何を思い浮かべるだろうか。

私の家は母子家庭だ。母は、私が４歳の頃から、ずっと一人で私と姉を育ててきてくれた。母の仕事の都合で私はそれまで通っていた幼稚園から保育園に転園することになった。転園してまもない頃は、友達が一人もいない保育園に行くことを毎朝のように嫌がって泣いていたことを、今でも申し訳なく思っている。

母子家庭になってから、環境の変化を感じることは多々あったが、生活に不満を抱いたり、不自由だと感じたりすることは一度もなかった。それは、小学校に上がってからも同じだった。小学校に上がってからは、援助についての書類を目にすることが多くなり、自分の家が母子家庭だから、税金から援助を頂いているということを知ったが、どういった内容なのかまでは知らなかった。

ある日、中学３年生で行く修学旅行にかかるお金の額を知り、心配になり母に聞いてみた。すると、「就学援助制度」という学用品費や給食費、修学旅行費など、就学に要するさまざまな費用を援助してくれる制度にお世話になっているということを知った。私の知らない様々なところで、数えきれないほど沢山の人々の税金によって、私たち家族の生活は支えられていたのだ。さらに、私が日々の生活に不満や不自由を感じることがなかったのは、「就学援助制度」によって、最大限の援助を頂いていたからだと知った。

私は、このことを知ってから、税金を払ってくれている全ての人々に対しての感謝の思いと同時に、もっとはやく自分の生活を支えてくれている制度について知ろうとするべきだったと後悔をした。

私は、「幸せ」ときくと、「日々の日常」ということを思い浮かべる。「日々の日常」は、決して当たり前のことではなく、身近な人はもちろん、遠く離れた誰かなど、様々な人の支えによって成立しているものなのだということを、税金の使われ方を通じて学んだ。

私は、私の就学を支えてくれている人々の思いにこたえることができるよう、社会に役立つ知識をつけ、貢献していきたいと思う。

そして、自分が税金を払う立場になったときには、誇らしい気持ちでいようと思う。私が払う税金は、いつか誰かの支えとなるはずだから。